

いい音を鳴らし、書くこと

作家・作詞家 高橋久美子

たかはし くみこ



春、富山県立山町で、レコーディングエンジニアの古賀氏こと古賀健一さんとトークライブを開催した。自分にとつての「いい音」が何かを考えるイベントだった。古賀氏の考えるいい音は、音の仕上がりである。例えば、100年前のドイツ、英国、日本の屋内の音では、それぞれの生活様式から足音のアンビエント(響き)が全く異なる。映画の音作りにもかわっている彼は、アンビエントだけを録音しに様々な建物に出かけるという。実際イベントの数日前までウィーンにいたそうで大聖堂の音を聴かせてもらった。石の教会の荘厳な響きはミサの映像を浮かび上がらせた。同じ時代でも日本なら土間が主流なので、残響はもっとマットだとか、会場にあった欄間は音を乱反射させるから華やかになるとか、経験に基づく肉厚なエピソードの数々よ。「まだ土間の家という方がいたらアンビエント録らせてもら

えませんか？」と言うマニアっぷりに爆笑したのだ。

私の考える「いい音」は、つまりはそういうことだ。「好き」を突き詰める古賀氏のように、その人がその人の音を出せる環境で生きたらなら、必然的に個性というアンビエントはダダ漏れるもの。心の音を、全開とはいかなくても時々開けられる場所があることが、めぐりめぐって「いい音がする文章」を書くことにつながると思う。

お客さん達に、職場は自分の音を出せる環境かと聞いてみると、なかなか難しそうだった。ただ、「お世話になります」などのビジネス構文であつても、あれは「初めまして」のチューニングともいえる。段々と、相手とチューニングが合ってきたら、少しずつ自分の音を鳴らしてみようか。AI全盛期だからこそ埋もれない言葉を探す必要がある。

方言も自分らしい音の一つだが、職場で方言を出せる方はゼロだった。ほりゃほうじやろ。私だって原稿では方言を出さんのじゃけん、職場で方言やか出すわけないよな。効率が悪先される場では個性は淘汰され、それでも残る余韻こそが「私」だとも思う。

でも、もし自分の音がわからなくなった時は、自分のルーツの音のある場所へ行ったり、電話でもいいので故郷の言葉で話してみたりすることも一つだ。『千と千尋の神隠し』で、千尋が自分の本当の名前を忘れなかつたから現実世界に戻れたように、意識せず話してきた「方言」こそ、その人の根音ではないか。

先日、作家の土門蘭さんとの対談で互いに方言で話し、「蘭ちゃん」と呼んでみた。「話したらいかんことまで話しそうで怖いわ」と言いながら、彼女はみるみる開かれていった。地方出身の私たちにとつて標準語はステージ上、方言はパジャマ姿のような



トークイベントの様子

そのままの自分。恥ずかしさとともに、方言でしか出ない表情がある。冒頭の古賀氏というニックネームは、18年前城マニアの彼に私が名付けた。それが定着し、

音楽業界の重鎮になった今もみんなからそう呼ばれている。古賀さん、土門さんと呼ばれるのと、古賀氏、蘭ちゃんと呼ばれるのでは、当然表情も変わってくる。響きつて重要なのだ。

この頃は、仕事の依頼メールもAIによるものが増えてきた。そつなく上手なんだけど、いい音が鳴っていない。そう、ニックネームとは逆の愛すべきいびつさがない。スンとして無味無臭な文章は、読み飛ばしてしまうことも多い。あれは時短のようで逆効果だろう。AIで生成した文章に手を加えて、人間らしさを残すようにしているという人もいて、一枚上手!と思った。

私の作詞のルールには「大きなことを書きすぎない」というのがある。「夢を追いかけて」とか「やまない雨はない」とか、どこかで聞いたことのある言葉だけでコーティングされた歌詞はどうも響かない。私でなくても誰かがもう書いているし、AIも得意だろう。それに対し、日記のオリジナリティたるや。歌詞もその延長線上でいいのだ。あなたと全く同じ今日を送った人は世界中どこを探してもいない。一日、数行でいいので日記を、誰にも見せない言葉を書くことを薦めたい。ついSNSで披露したくなるけど「いいね」の数が正解になりがちな世界で、自分の鳴らしたかった音を無視し、見せること前提で書くのは危険だ。自分が本当は何を言いたかったのか、日記の中でいい音を鳴らす練習をする。千尋が名前を取り戻したように、私たちも自分の音を取り戻す時間を持つことが大切ではないか。

時の調べ Essay

略歴

作家・作詞家・農家。1982年愛媛県生まれ。チャットモンチーでのバンド活動の後、2012年より作家に。現在愛媛と東京の二拠点で生活をし、作家とお百姓の二足の草鞋をはく。著書に、エッセイ集『いい音がする文章』(ダイヤモンド社)、『わたしの農継ぎ』、『その農地私がいります』、詩画集『今夜凶暴だからわたし』(以上ミシマ社)、小説集『ぐるり』(筑摩書房)など。最新刊は絵本『こくとうびよ』(あかね書房)

